

# [dōnk]

DONC どんく

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0006 津市広明町418  
418, Komei-cho Tsu-shi  
TEL 059-226-2766  
FAX 059-229-0967

N° 63 janvier 2003 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

1/25

## 柏木隆雄先生による文芸講演会

文豪ヴィクトル・ユゴー生誕200年にちなんで  
久しぶりに三重日仏協会の「文芸講演会」を開催します。

わが国でもっとも多くの人々に知られ親しまれたフランスの大家作家といえば、『ああ無情』〈Les Misérables〉のヴィクトル・ユゴーか、『三銃士』のアレクサンドル・デュマ（父）ではないでしょうか。実はこの二人とも19世紀初頭の生まれで、相次いで生誕200年を迎えます。そこで本会でこれまでもフランス近代詩やバルザック、ルナールなどについてたびたびご講演をいただいて好評の大阪大学・柏木隆雄教授（松阪市出身）にまたお願いして、今回は1802年生まれユゴーについてお話していただくことになりました。

題して

ヴィクトル・ユゴー、パリの王様の真実  
— 生誕200年にちなむよもやま話 —



ヴィクトル・ユゴー

「17歳で国王を驚かせるほどの詩才を示し、教室で先生がしゃべる言葉をすらすらと韻文詩に置き換えて、落書きを叱ろうとしたその先生を仰天させた天才。明治の民権運動のなか、自由の闘士と尊敬されたユゴーの破天荒な文学の、その優しさと豪儀さと、そして恐るべき言葉の主としての、1世紀にわたる生涯をスケッチしてみたい」と柏木先生はおっしゃっています。ジャン・バルジャンは知っているも、作者のユゴーの人となりについてはあまり知らないという方が多いと思います。一般に無料公開しますので、お誘い合わせてご来聴ください。

- 1月25日(土) 午後3時～5時
- 津アスト・ホール3F ミーティングルーム①（津駅東口すぐのビル）  
講演会終了後、先生を囲んで懇談の夕食会を予定しています（詳細未定）。  
問い合わせ、申し込みは、井土または滝沢まで。



## 会員の随想

フランスの文豪・V. ユゴー、A. デュマが相次いで生誕200年を迎えるなら、わが国では三重県出身で国際的に評価の高い映画の巨匠・小津安二郎が今年（2003年）生誕100年となるため、彼を顕彰し、その作品を上映・回顧する催しが全国的に展開されようとしています。そこで、三重大学在任中には三重日仏協会のフランス語講座の講師などもお願いした渡辺諒（芳敬）先生に小津安二郎にかかわる一文をお寄せいただきました。

現在、渡辺先生は横浜市立大学国際文化学部助教授、フランス現代文学・思想がご専門ですが、映画の世界にも造詣が深く、これまでも独特の切り口で、黒沢や小津を論じておられます。

## 小津映画「失敗作」考

渡 辺 諒

小津安二郎といえば、「晩春」「麦秋」「東京物語」等の親子の情愛を描いた映画が有名ですが、男女のドラマを描こうとした作品は通常失敗作とみなされ、あまり評価されていません。「風の中の牝鶏」「早春」「東京暮色」といった作品がそれですが、とりわけ「東京暮色」はキネマ旬報ベストテン19位にランクされ、以後小津はいわゆる小津的世界に戻っていったとされます。

「東京暮色」（1957）は、「真夏の死」を描いた「東京物語」に対して、「真冬の死」を描いた作品ということができます。笠智衆演ずる父親は、妻山田五十鈴に逃げられた初老のサラリーマン。長女原節子はすでに嫁いでおり、子供も一人いますが、夫婦関係はうまくいっていません。次女有馬稲子も恋人とのあいだに子供ができてしまい、行き場を失ったままです。要するに、三者が三様に孤立し、すれ違い夫婦ならぬ、すれ違い親子の呈をなしています。そこに山田が出現し、母と娘の確執が加わるのですが、親子であるにもかかわらず、いや親子であるがゆえに、容易に接近し得ぬ距離が浮かび上がってくる映画となっています。

ここでは、従来の小津映画に見られる親と子とのほどよい距離が、ことごとくそれ以上接近し得ない障壁のように彼らの前に立ちはだかります。たとえば父と娘、母と娘が対等に向き合うことはほとんどありません。あったとしても、二人の視線の高さは異なったままです。たとえば、娘と対峙するとき父は座ったままで立ちあがろうとせず、娘も立ったままで座ろうとしません。他方、小津的構図ともいえるカップルが相似形に並び合い、同一のものを見つめるシーンはもはや至福の時を紡ぎません。夕暮れの海を前に、堤防に並んで座っている若い恋人同士の背中と、「東京物語」のあの熱海の明るい海を前にした老夫婦の背中とのなんという違いでしょう。皮肉にも、父と娘が並び合うのは、死んでいく有馬をまえにした場面でしょうかありません。死だけが、死を凝視することだけが人々を結びつけるかのように。とはいえ、三人ははたして死によって和解できたのでしょうか。

小津は一貫して、人間と人間の間横たわる還元不可能な距離を描いたということができますが、それはそれ以上近づくことも遠ざかることもできない安定した距離にもなり得るし、そこに接近と離反という関係のダイナミズムが加わるとき、近づくことが遠ざかることであり、遠ざかることが近づくことであるような不安定な距離にもなり得ることはいうまでもありません。とりわけ男女の関係は、その典型とっていいかと思いますが、実際「風の中の牝鶏」や「早春」では夫婦関係が男女のそれとして真正面から描かれ、男女間の伸縮自在で不安定な距離が強調されました。それに対し、この「東京暮色」は父と娘の親子関係をいわば一種の男女関係・異性関係として描こうとしたところに妙味があると思います。最終的には、安定／不安定を乗り越えて、人と人とを隔てる距離そのもの＝死そのものへとわれわれを差し向けるのですが。

換言するなら、「東京暮色」は、「距離の作家」小津安二郎がその極限まで行こうとした作品ということができます。いうならば人間の孤独を突き詰めた作品。「東京物語」に感じられた慈愛のようなものはもはやここにはありません。要するに救いがないということですが、それだけ小津の生硬さ、ある種の人間臭さが一番出た作品とはいえないでしょうか。「戦後初めてのドラマティックな作品」とは小津自身のコメントです。



## 「小津100年」を記念して 三重映画フェスティバル（6月）

いま6月をめざして『小津安二郎生誕100年記念・三重映画フェスティバル2003』（同実行委員会と三重県文化振興事業団の共催）の準備が進んでいます。これは、この年を機に、小津安二郎のほか三重県が生んだ衣笠貞之助、藤田敏八という、今は亡き映画の巨匠たちを顕彰する目的を中心に、いろんな意味で三重県にかかわりのあるすぐれた映画作品の上映、資料展示、講演、映画音楽コンサートなど多彩な事業内容が予定されています。三重日仏協会のメンバーでも、映画評論家の吉村英夫さんが実行委員会会長としてがんばり、井土もその補佐役としてかかわっております。

フランスとの関わりは、小津安二郎作者のフランスでの人気は驚くほどで、近年は毎年のように、パリその他で〈OZU〉の特集上映が行われていますし（筆者も昨夏、パリで「カラーによる小津の6作品」という企画の広告に遭遇）、また彼の32冊の「全日記」は96年にフランス語版が出版され、かの地でかなり売れているとのこと。アラン・レネやトリュフォー等の映画人に与えた影響も決して小さくありません。亀山市出身の衣笠については、その『地獄門』が1953年カンヌ映画祭でグランプリを獲得したことはあまりにも有名ですし、「無頼派」の藤田も四日市高校から東大フランス文学科に進んだ経歴の持ち主で、フランスのいわゆるヌーヴェル・バーグの作家たちと相互に影響し合ったという見方もあるようです。

また現役の映画人で、戦時津市の小学校に通っていたというアニメの巨匠・高島勲氏は昨年秋パリ近郊のオーベルヴィリエ映画祭に『おもひでぼろぼろ』などの代表作をもって参加し、フランスの子どもたちに大変な人気だったということです。高島氏は6月の映画祭に際して津市で講演されます。（井土 記）

## 2/15～3/21 生誕80年記念特別企画 蘇るジェラルール・フィリップ 映画祭（後援事業）

戦後フランス映画界に彗星のように現れ、天性の美貌と舞台で磨かれた演技力で数々の傑作に出演、押しも押されもせぬ大スターとなり、その絶頂期に36歳で夭折したジェラルール・フィリップ。その生誕80周年を記念して、このたび新装された名古屋東区の「名演小劇場」で日本初公開を含む全出演作品18本が下記のようなスケジュールで一挙に上映されることになりました。三重日仏協会・後援事業のため、会員は当日入場料200円の割引があります。この <done> をご持参下さい。

- |         |             |                   |
|---------|-------------|-------------------|
| 2/15～17 | 肉体の悪魔       | モンバルナスの灯          |
| 2/18～21 | しのび逢い       | 夜ごとの美女            |
| 2/22～24 | 危険な関係       | 狂熱の孤独             |
| 2/25～28 | 危険な関係       | 輪舞                |
| 3/1～3   | 愛人ジュリエット    | 美しき小さな浜辺          |
| 3/4～7   | 白痴          | すべての道はローマへ        |
| 3/8～10  | 花咲ける騎士道     | ティル・オイレンシュピーゲルの冒険 |
| 3/11～14 | 悪魔の美しさ      | 夜の騎士道             |
| 3/15～17 | 赤と黒         | 星のない国             |
| 3/18～21 | パルムの僧院（完全版） | 星のない国             |

入場料：当日一般 1,700円

問合わせ先：名演小劇場 052-931-1701



## グルドー＝モンターニュ大使が帰国、大統領外交顧問に 後任のベルナール・ドゥ・モンフェラン大使が着任

2002年11月、モリス・グルドー＝モンターニュ駐日フランス大使から、矢谷隆一三重日仏協会会長に宛てて、下記のようなごあいさつの書簡が届きましたので、全文（訳）をご紹介します。

拝啓 時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さてこの度、4年の日本滞在の後、ジャック・シラク フランス共和国大統領より外交顧問・シェルパに命ぜられました。

人生の中でも特筆すべき4年間を過ごした日本を離れるにあたり、共に築き上げた日仏関係の発展のため、常にご支援とご理解を賜りましたことにお礼を申し上げます。

多少なりとも前進させることができたと自負している日仏関係に、私の離日で終止符が打たれる訳ではありませんし、これからも信頼関係に根差した共通の利益の強化のために力を尽くして参りたいと存じます。また、私同様に、後任のベルナール・ドゥ・モンフェランにもご指導のほどお願い申し上げます。

敬 具

(手書きにて) 三重における日仏交流に感謝します。心から。

後任のベルナール・ドゥ・モンフェラン (Bernard de MONTFERRAND) 大使は、1945年生まれ。パリ政治学院卒業、ハーバード大学サマースクール、仏国立行政学院卒業後、外務省に入られ、パリ政治学院助教授、学部長など歴任。日本に来られる前は1995年から駐オランダ、2000年から駐インドの大使として活躍されました。「フランスと外国」など3点の著述もされております。

## 二つの展覧会

### 中島世津子展



かつてパリでめざましい芸術活動をされ、現在はジャン＝フランソワ・ダム夫人として松阪にお住まいの中島世津子さんの個展は11月9日～15日、ご自宅の画塾スピラルで開催。

### アルランディス展

昨年11月と12月、三重日仏協会にゆかりの深い二人の画家の個展が開かれて好評を得ました。その様子を写真（モノクロームで残念ですが）をご紹介します。



「日本におけるフランス年」美術展（津市）での来日以来三重県とはおなじみになり、この6月も四日市市で「3人展」（いずれも三重日仏協会主催）を開いたアルランディス画伯（マルセイユ在住）は、今年再度の来県で津市のNHKギャラリーで12月3日～8日個展を開催。今回の来日は特に日本のもみじを描くのが目的で、展覧会のテーマも『南仏と日本の秋・光と色の十字路』。写真は会場でのアルランディス氏とローザ夫人。